

へ、密林鬱蒼たる森相を有して居たが、火田民はこれを片端より焼き拂ひ、其處に蕎麥・粟・陸稻の如きものを二三年耕作し、收穫減少すれば放棄して他に移り、火田耕作によりて生活した結果、山林の荒廢した部分である。

牧場地帯は火田地帯に接する部分及び耕作地帯と接する部分に、石垣を築設して、牧馬牛の逸出を防いで居る地帯である。而して上部の石垣を上場城と謂ひ、下部の石垣を下場城と唱へ、今尙はその跡を残して居る。李朝時代牧場制度の稍廢するに至るや、右の上城と下城の中間に石垣を築造し、これを中場城と稱し、その下部を耕作する時は牛馬を上部に放ち、上部を耕作する時は下部に放牧したと傳へられて居る。

耕作地帯は最下部に位し、海岸に面し人家に近接せる地帯にして、古くより農作物の耕作に利用され、最も肥沃な土地である。以上は過去に於ける土地の利用状況であるが、現在に於ては多少、往時に比し變化して來た。従つて今日の實情からすれば、土地を森林地帯、山間地帯、中間地帯、及び海岸地帯に大別するを至當とすべく、即ち森林地帯と云ふのは漢拏山の上伏以上の地を總稱し、その大部分は今尙ほ鬱蒼たる密林が約二里以上の幅を以て圍らして居るのである。この地帯は國有林の甲種要存林に屬して居る。

この地帯の一部は現に椎茸製造の爲めに利用され、椎茸製造業を經營して居る者は西卿氏外五名あり、事業當初の投資額約八萬圓、毎年の經費約五萬圓にして、年生産見込額約二十萬圓に達し、森林の約五百町歩に亘つて實施されて居る。

山間地帯は森林地帯の下部に位し、中間地帯に至る迄約二里乃至三里の幅を以て圍らす一帯にして、今より十數年前迄、火田民の跋扈したる火田地帯はこの部分であり、今尙はその痕跡が歴然として残つて居る。この地帯は殆んど驛屯土に屬して居り、耕地面積約四萬五千町歩あり、本島、總耕地面積の約三分の一餘に該當する廣大なる面積を有して居るが、その利用状況は全くの原始的で、放牧又は茅の採取に利用されるものがその大部を占め、耕作に利用さるゝ面積は極めて僅少である。而してその耕作する作物たるや主として稗・大豆・煙草の類で、最も利用さるゝもので十年三耕、甚しきは十年一耕、普通十年二耕の程度に過ぎないのである。この地帯内には殆んど人家なきも、明治四十四年頃迄、即ち火田民耕作を認め居つた當時は相當の火田民が散在して生活して居つたさうである。

中間地帯は山間地帯と海岸地帯の中間即ち漢拏山の裾に當る地帯で一里乃至二里の幅を以て圍らして居る。この地帯には約三萬町歩の耕地を包含して居り、從來前者と同様其の大部分が驛屯土に屬して居つたものであるが、現在はその大半が民有に歸して居る。この地帯は前者に比し、非常に利用の程度が進んで居るが、それでも尙ほ全耕地の五割以上の面積が放牧又は茅の採取に利用せられ、その他の面積は漸く五

年に二三耕位の程度で耕作されて居るに過ぎない。この地帯は土質が石礫の多い上に、地味の瘠薄なるため、他の地帯に比し最も利用價值が少く、人家は殆んど見出すことが出来ない。この地帯に於て耕作する農作物は蕎麥・稗・粟・大豆・陸稻等の種類で、濟州島民一般が最も肥料分を要すると認むる麥作は殆んど絶無である。

海岸地帯は最も平地に屬し、濟州島全島を通じ海岸に沿ふて一週する道路の左右約一里内外の地帯にして、この地帯に屬する耕地は、殆んど全部民有であつて最も宜く利用せられ、普通五箇年に一回、多くも三箇年に一回の休閑を爲すに過ぎない。濟州島の畚は城内及び西歸浦を中心として悉くこの地帯内に包含され、その以外には一坪の畚もない。これは地質の關係上、水分が上部に於ては全部地下に滲透し、この地帯に來て湧出するから、これを利用して畚を設けるのである。この地帯の耕地は悉く耕作に利用され、全面積の約一割も休閑して居るものはない。従つて茅の採取の如きは勿論、馬牛の放牧らしい放牧は殆んどなく、耕作する主なる農作物は、水稻・麥・粟・甘藷・棉・蕎麥・陸稻・蔬菜類・柑橘等で、島民の食糧品の大部はこの地帯で生産されるのである。

農具

耕種用農具として普通に使用されて居るのは、濟州特有のものに犁・地均し具・ホミ・及び除草具の四

種がある。この外に陸地部で使ふ鋤（鋤の幅二寸内外長さ四寸内外、鋤と柄との角度八十度位、柄の長さ三尺内外）も少しは用ひられ、また陸地部や内地の農具を持つて居る者もあるが、これは極く稀である。右の犁は陸地部に於ても稀に見るが、普通陸地部で使用する犁の鋤の略ぼ半分位の大きさで、全體の形が小形に成つて居るが、耕耘は凡べてこれでやり、それを牛に挽かせて使用するのである。地均しに使ふものは造り付けにしたものでなく、必要の度毎に製作し、枝の叢生した木を四尺位の長さに切り、これを數本一本並びに平面に繩を以て括り付け、この上に石を乗せて牛を以て引張り廻はして粗耕し、跡を地均し攪拌するのである。

ホミは陸地部のホミと全然形を異にし、幅五、六分、長さ七、八寸の鐵製のものに、長さ一尺位の木製の柄を付けた、陸地部の細形鎌同様のもので、これを以て中耕又は播種用に使ふのである。收穫の際にもこれで刈取るものもあるが、收穫用の鎌は別に持つて居るものもある。除草具は大體に於てホミに類似のもので、幅四、五分、長さ三寸位の金具に、一尺位の柄を付けたもので、除草は凡べてこれを以てやる様である。

この外に開墾用具と目すべき、實に原始的な農具がある。これは高さ四尺位の弓形のもので、下部に丁度牛の角同様の形と大きさを有する金屬製のものが二本、三寸位の間隔を置いて付けてある。その上に幅四

寸位長さ六寸位の蒲鋒形の板があつて、これに足を掛け土に踏み込むのである。而してその上に長さ三尺位經二寸位の圓い棒が弓形に付いて居つて、この上部を持つて土を起すのである。この農具は新たに開墾して耕地にしたり、又は道路を切つたりする時に使ふもので、普通の耕地の耕耘に使用するものではない。調製用具は大體に於て陸地部と同様であるが、唯だ杵を以て搗く臼は非常にその趣を異にして居る。即ち深さ二寸位經三尺位の圓い盆形（木製）の底部に高さ五寸位の脚を三本付け右盆形の中央に經七寸位、深さ六、七寸の石製の壺を据付けたもので、これは普通唐椒や穀類の製粉用に使ふが、陸地部では見られない農具である。

### 農 耕 法

全羅南道に於ける一戸當耕地面積は約一町二段歩であるが、濟州島は一戸當約二町二段歩の耕地を有しその全部が畑作である爲めに、農家は畑作を主とし、海岸地方に於ては傍ら漁業を營むのである。耕種組織は資本に於ても經營法に於ても頗る粗放にして、原始的耕種法の域を脱しないが、漢拏山を中心に、火田地帯、牧場地帯、及び平地部と漸次海岸地方に降るに従ひ、幾分集約の度を加へて居る。麥は濟州島に於ける食糧品中第一位を占め、その年産額三十萬石餘に達し、實に島民の生命を左右するを以て、當局は優良種普及の爲め、大正六年に改良增收五箇年計畫を樹て、今やその移出を見るに至つ

たのである。試みに麥作の方法を見るに、これには大體二つの方法があり、一つは普通の種子蒔きで、濟州島民の大半はこの方法でやるが、先づ牛耕（犁）で粗耕し、これに段當八升乃至一斗位の種子を撒蒔するも、處に依りて肥料の種類及び數量を異にし、厩肥なれば段當百貫内外、海藻なれば生の儘のものは段當百五十貫内外、乾燥したものであれば百貫内外を撒播して、その上を地均し具を牛に牽き廻はさして土壌、種子及び肥料を攪拌するのである。他の方法は、種子肥蒔きと稱するもので、南濟州の過半即ち東中、西中面と、右面及び中面の一部はこの方法でやる。普通に行はるゝものは厩肥に豚糞を混ぜて泥狀にし、これに種子を混じて、その上を牛又は馬に踏ませて厚薄の無い様に能く混ぜ合せ、これを牛耕を以て粗耕した耕地に、適當の間隔（勿論一定はして居らぬが三、四寸位間を置いて蒔く様である）を以て點々置いて行き、その後から牛耕で起し合せて覆土するのである。この外に粗耕もしない休閑地の雜草の生へて居る上に、直ちに右の厩肥と種子と混ぜたものを前同様に點播し、その上を初めて牛耕覆土する丈けのものも一部に行はれて居る。

右の如くして播種した麥はその後收穫期迄に二、三回除草をやつて收穫するので、追肥の如きは行はないが、それでも段當七、八斗から一石一、二斗位の收穫がある。刈り取つた麥は宅地に擴げ、乾燥を待つて連架を以て打ちて脱穀し、風選したる後ち格納するのである。尙ほ精白にするにはヨンチャモン（大き

なローラー式の廻轉石を牛又は馬に牽引さすものを用ゆるのである。播種期、收穫期等は陸地部と大差なく陸地部より十日乃至十五日位生育期が進んで居る様である。尙ほ濟州島には「濟州培取」と稱する優良大麥あり、その品質全鮮第一とせられ、現在總作付の七割を占めて居る。

**蕎麥** 蕎麥は牛耕で粗耕した上に、種子を段當四升乃至六升位撒播して、その上に灰を二、三十貫位撒らし、それを地均し具で土と種子と灰とを攪拌する丈けであるが、段當七、八斗から一石以上の生産を擧げて居る。本作は播種後一回も除草せぬが、これは發芽生育すれば地面一圓に生へ揃ふから、日光の直射を遮る關係で雑草が生へぬのである。長い間休閑せる土地に農作物を栽培する時は、その前年にこの蕎麥を蒔いて雑草を撲滅して置き、然る後ちに行ふことにして居る。

**雜穀** 以上二種の農作以外、即ち粟・稗・陸稻・大豆等は全部無肥料栽培と稱しても宜しく、唯だ粟には稀に前年に休閑せしむるか、又は非常に進歩した一部の地方では青刈大豆を施用する場合もあるさうである。これ等の作物の栽培法も大體に於て同様で、牛耕で粗耕した上に種子を撒播し、その上を地均し具で攪拌し、生育中一、二回除草するに過ぎぬのであるが、それでも大體左の段當收量を穫ることが出来るのである。

粟

七、八斗乃至一石内外

陸

稻

七、八斗

稗

五、六斗乃至七八斗

大

豆

四、五斗乃至七斗内外

濟州島に於ける農作物の耕作中最も奇抜なのは粟の播種である。即ち粟は先づ牛耕を爲し、これに種子を撒播して後ち地均し具で攪き廻して、種子と土とを混ぜると、その田に十頭内外の馬を入れてこれを矢鱈に追ひ廻はし、踏み付けさして播種後の鎮壓をやるのである。これは十粒が非常に細かく、且つ乾燥の爲め輕鬚に過ぎて發芽に要する水分の供給が困難だから、これを鎮壓して土粒を密着せしめ、水分を供給する方法を講ずるのである。

濟州島の馬は有名なもので、しかもその数は數萬を算するのであるが、これを飼育する最も重要な意義は、右の鎮壓に使役する爲めに在り、物資の運搬又は人の乗用に使役する如きは、その用途の極めて一部分に過ぎないのである。

**甘藷** 甘藷は濟州島農作物の中で重要な位置を占めて居るが、大體に於て耕種法は陸地部に類似して居る。即ち種子甘藷は農家の附近に五、六尺の穴を掘り、底部に粟稗を敷き、これに種子甘藷を入れて粘土を覆ひ、その上に粟稗、屋根を被ひ、雨露を凌ぎ貯藏する（この點は陸地部と趣を異にす）。苗床は四月

末頃作るが、厩肥類の肥類を澤山やつて四尺幅位の短冊式の畦を作り、その列に平行又は直角に一尺五寸隔の列に、甘藷と甘藷とは二、三寸の距離を置いて、甘藷の隠るゝ程度に覆土し、その上に粟稗を薄く敷いて乾燥を防ぐのである。本田の方は五月末頃苗を挿すのであるが、畦幅は一尺二三寸、株間は殆んどなく密植し、そして葉身丈けを地表に出すのである。その他は蔓返しをやる丈けだが、段當收量四〇〇貫内外の收穫を擧げて居る。

**水 稻** 濟州島の水田面積は僅か八百九十四町歩、年七千石内外の生産にて、多くの島民は冠婚葬祭用として年三、四回米を食用とするに過ぎないのである。故に水田の開墾は當分望みなく、殊に同島はその地質が玄武岩の裂目縦横に走り、降水は深く岩盤の下を通り、地下水となりて海岸又は海岸近き丘陵下に至り湧出するので、河水を見ることは稀である。従つてこれを水田に利用することは困難である。山地帯に人家なく、海岸部に人家集團し部落をなして居るのも、飲料水の關係に由るのであらう。従つて耕地と人家との距離は遠く、粗放的なる農業を行ふもこれが一つの困をなすものである。

**柑 橘** 氣候の關係上朝鮮の他の地方には柑橘は栽培されて居らぬが、本島には昔よりこれが栽培盛んに行はれ、濟州十景の一に數へられた位である。而してその種類も甚だ多く、現に十二種以上もあり、その傳來の歴史に就いては年代を明かにすることが出来ぬが、本島の文獻に徴すると、約五百年前より栽培

せられたやうである。内地の優良種は十餘年前より試作せられ、その後調査研究の結果、良成績を擧げ、有望なることを確め、當局は大正九年より毎年七、八千本の優良種を栽培し、甚だ良好なる成績を擧げ、副業的栽培を積極的に奨励して居る。

由來本島は内地の柑橘生産地と生産費に於て競争し得る便利あり、これが栽培に適する南部及び東南部にある土地は、優に三千町以上もありて、年中霜を結ばざる天恵の土地である。柑橘栽培には氣候の關係上一定の制限あるも、需要の方にありては全く無制限に販賣し得られ、内地の著名なる産地と比較して、天然要素に何等劣るべき點を發見しないから、その將來は極めて有望である。

**蒟 蒻** 蒟蒻を積極的に栽培するに至りたるは、嘗て齋藤總督より島司に直接栽培方を促されたるに始まり、種苗場に於て試作の結果好成績を得、最近まで毎年種子芋として五千貫餘を購入配付し、現在にては多額の移出を見るに至り、段當二年生五六百貫内外の收量にして、内鮮人の間に副業として盛んに栽培せられつゝある。

**養 蠶** 本島の氣候は養蠶に好適なる天然要素を有し、桑科の如きも四月上旬に開鏡し、十一月迄に生育し、霜害又は凍害皆無である。中間地帯の如きは、盛夏の候と雖も八十四五度に昇ることなきが故に、夏秋蠶の飼育に最も適し、良好なる成績を収め、また土地及び勞力共に豊富なるため、蠶業經營上實に天

與の地にして、生産費に於ても内地及び陸地の蠶業地にその比を見出し得ざる所である。現在の桑田段當收繭高一石にして、全鮮の段當六斗に比すれば、本島は明かに好適地たるを證することが出来る。

當局は大正三年簡易乾繭器を配置し、繭共同販賣を奨励し、大正十一年以來更に乾繭場を四個所に設置し、極力産繭を奨励中にして、最近内地人の移住に依り益々これが好成績を擧げつゝあるは喜ぶべきことである。大正十四年總督府の産繭百萬石增收計畫に基き、全羅南道にも十箇年計畫樹立せられたるを以て本島に於ても従來の經過に鑑み官民協力して斯業奨励に努め、現在農家戸數の三割に養蠶を營ましめ、各戸三畝歩の桑田を造成し、一戸平均一枚半の蠶種を飼育せしむる方針である。その達成の曉には、桑田六百町歩、掃立蠶種一萬八千枚、産繭高七千二百石の巨額に達することになつて居る。

**棉作** 濟州島に於ける棉作の起源は明かでないが、今より約四百年前同島の西南部に栽培せられ、それが、漸次島内に擴まつたのである。そして李朝末葉にはその面積も一千町歩、産額五十萬斤内外に過ぎなかつたやうである。明治三十八年頃より内地人漁業者の入島と共に、島民は内地式漁撈を營むに至り、漁具用綿糸の需用増加し、従つて棉花の作付段別千二百町歩迄に普及せられたのである。尤も當時の棉花の種類は、收量の少なき在來棉であつた。明治四十三年濟州種苗場支場に於て始めて陸地棉を試作した所が、その成績が佳良であつたので、島の西北部即ち新石、舊右面を一圓とする棉作組合を設立し、當局

と共に極力奨励普及に努めて居る。更に當局は棉花の奨励に一段の努力を拂ひ、第二期增收計畫を樹立し、大正七年島に技手を駐在せしめ、試作調査に當らしめ、大正八年には全鮮を凌ぐ段當百六十斤と云ふ異常の成績を擧げ、棉作組合の區域を擴張して島一圓と爲し、各面試作圃と模範作圃を設け、技術員及び組合職員をして實地指導に當らしめ、栽培法の改善と增收を計り、併せて共同販賣所の増設等を期し、農民の利便を計つたので、陸地棉作の可能と對抗作物に有利なるを農家が自覺し、現在は作付段別に千餘町歩、年産額百七十萬斤、耕作人數一萬六千を數ふるに至り、在來棉は今やその影を見ざるに至つた。

元來陸地棉は熱帶植物にして、溫帶と寒帶との界に至る迄生育し得るものであるが、同島はこれが中間に位し、氣溫に於て何等の不足なく、且つ耕地面積も廣大にして、農家一戸當二町三段歩の割であるから、如何に棉作を奨励するとも、他の作物との衝突を生ずべき虞なく、尙ほ土質は礫質壤土大部分を占め、棉作地帯たる陸地方面の壤土より肥沃であり、加ふるに一般植物に必要な水分は陸地方面の降水量に大差なく(年平均千三四百ミリメートル)、降雨の回數は陸地方面より遙かに多いのである。一體に火山岩は水の浸透作用激しきも、降雨の回數多きため、棉作上濟州島は天與の好適地と云ふことが出来る。

### 肥料

濟州島に於ける農耕法は極めて粗放的で、最も集約的な栽培を爲す場合でも五、六年の内一箇年位は休

閑し、甚だしきは五箇年に一耕しかせぬものあり、更に極端なのは十箇年に一耕する丈で他の九箇年は連続して休閑するものもある。肥料は近年島廳の共同購入斡旋に依り、硫酸アムモニアを施用する者も相當にあり、また干鰻・メ糟を用ふるものも少許あるが、耕地面積十萬町歩に對しては殆んど九牛の一毛に過ぎず、大體に於て肥料の主なるものは、厩肥、海藻、青刈大豆、木灰、人尿である。厩肥は牛糞尿・馬糞、及び豚糞尿であるが、牛糞尿の方は牛は約四萬頭と云ふ莫大な頭数を有すると同時に、春・夏・秋の三季は放牧するとしてもその大部分は夜間は牛舎に飼育し、冬季間は舍飼する關係上、相當數量の厩肥を得られる譯で、肥料中最も重要なものはこれである。馬糞を肥料に施用するのは、馬の頭數二萬頭内外なるに對し、その量は僅かなものである。馬は春・夏・秋の三季に於て、夜間に限り家に連れ歸る數も相當あるが、牛程ではなく、また冬季期は全然野原に放牧し通しにするのであるから、割合に厩肥を採る機會が尠く、殊に馬糞の大部分は温突の焚物に供用せられて居る。豚肥は豚の頭數が約四萬頭もあるのと、これを放牧せぬ關係から牛肥に次ぐ重要な厩肥である。以上の厩肥は島内を通じ最も普遍的で、且つ重要な肥料である。

海藻は全島を通じて普ねく施用されて居るが、これが製造及び施用の量に就ては地方によりて非常に差等がある。大體に於て濟州面、新左面地方は最も盛んであるが、これは正月の初めから四月の末頃迄に海女

が海中を游いで採るので、この寒む空に海中に潜り込むのであるから、十四、五歳の頃から練習をやり、二十歳頃には一人前に成るのである。海藻を採取する農家は全農家戸數の約半分即ち一萬二千戸位で、その年採收額百五十萬貫以上に達すると云ふことである。

海藻の肥料成分は種類によつて差異があるから一概には云へないが、濟州島は「ホンダハラ」が最も多く、その成分を中央試験所で分析した成績に依ると、乾燥量百貫中の成分は左の如くなつて居る。

肥料成分比較表

	ホンダハラ	青刈大豆
窒素	二・〇〇〇	二・五〇〇
磷酸	〇・八〇〇	〇・四〇〇
加里	五・〇〇〇	三・〇〇〇

これを肥料價に換算すれば「ホンダハラ」は約十四圓八十錢、青刈大豆は約十四圓と云ふことであるが、實に貴重なものである。これが施用法としては生の儘を施用するものもあるが、その大部分は一旦堆積腐熟して後ち施用するのである。即ち採取した生海藻を直徑一間位高さ五、六尺の圓壘形に堆積し、その上部に粟稗を以て屋根覆を爲して雨露を防ぐ、斯して麥の播種期即ち十一月頃迄放置し、その間に腐熟せしむるのである。この海藻を生を儘で施用する場合は勿論、右の如くして堆積腐熟して施用する場合と

雖も相當の鹽分を含有するが、麥作に對して何等の有害現象を見ず、青刈大豆の鋤込は比較的普及して居る。本作の獎勵は全島を通じ相當の成績を挙げ、就中濟州及び新左面の海岸地帯一圓が最も盛んである。これは右の地域が比較的交通も便であり、また島廳から近い關係で、指導が徹底したからでもあらうが、同時に新左面の面長が農事改良に格段の熱心であることも亦興つて力がある。

更に休閑栽培の状態を見るに、この休閑の程度は地方によりて非常に趣きを異にし、山間地帯に於ては十年の内八、九年は休閑、中間地帯では五年の内三年位、海岸地帯では五年に一年又は三年に一年位、休閑するので、この間に於て地力を自然に養成し、その次の耕作に對する肥料養分の給源を作るのである。この休閑の程度も地方により非常にその趣きを異にし、山間地帯に於て最も多く、その全耕地の略九割以上の面積を占めて居る。中間地帯はその次に位し、その全耕地の五割内外、海岸地帯は最も少く、總耕地の約一割位に過ぎないのである。而してこれ等休閑地は概ね牛馬の放牧地として供用されて居る。また輪栽培に就て見るに、濟州島に於ては栽培する作物の種類が一定して居らぬ上に、その作付の順序も、循環する年數も定まつて居らぬ。従つて輪栽培等と稱するよりも、寧ろ隨意變換法に依るものと稱すべきであらうが、大體を通じて多種多様の中にも大同小異のものが澤山あるから、これ等の内普通に行はるるものを例示する。

一年目	二年目	三年目	四年目	五年目
一、麥	麥	大豆		
二、休	麥	麥		
三、粟	棉	麥		
四、麥	甘	休	粟 (又は陸稻)	
五、棉	大	麥	粟	休閑 大豆
六、粟	大	麥	粟	
七、粟	陸	休	大	大
八、甘	棉	休	大	豆
九、蕎	麥	粟	大	麥
一〇、大	陸稻 (又は粟)	休	休	
一一、棉	麥	粟	休	
一二、大	豆	大	開	
一三、粟	大	大	大	
一四、粟	大	大	大	
一五、粟	小	粟・甘	豆	大

一、經 濟

四一

輪 裁 樣 式 例



一六、粟	小豆	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
一七、小豆	大豆	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
一八、粟	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
一九、陸稻	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
二〇、種	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
二一、陸稻	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
二二、陸稻	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休
二三、蕎麥	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休

休閒を含まざる方式は、云ふまでもなく最も集約的な栽培を實行する海岸地帯にして、休閒の多い方式は、粗放なる耕作を行ふ中間地帯、山間地帯に於て行はるゝのである。

右の如く作物の變換又は休閒を實行する目的は、或は勞力を節約し、又は病蟲害を防避し、その他肥料分を養成吸収する等、各種の目的を有するものであるが、本島に於て右の方式を實行する所以は、主として肥料分の養成吸収を目的とするに過ぎないのである。

— 農業の記述に關しては、全羅南道倉田技手の調査、及び濟州島農會の調査に據りたる所が多い。 —

農業統計

耕地面積

耕地面積	九一、四四〇・七
内 自作	六八九・一
内 小作	二〇一・九
内 自作	六六、七八九・六
内 小作	二三、七六〇・一
休閒地	三五、五五二・九
内 田	三五
内 畝	三五、五四九・四
農業者戸數	三六、一六七
地 主(甲)	四
地 主(乙)	一四八
内 自作	二三、六二四
内 小作	八、六四三
小作	四、〇四八

農作物收穫高

穀物

生活狀態調查

種別	作付段別	收穫高	段當收穫量
粳米	八七〇.八	九.九三	一.二三四
糯米	一四三	一二七	八二〇
陸稻	三九七.二四	一六八.六六	四四四
大麥	三三.三六三	三〇.六八一	一.三四四
小麥	一七八九.七	八〇.一一	五二七
裸麥	一,二七〇.〇	一〇七.七〇	八四七
大豆	五,八三七.三	三七.六九〇	六四五
綠豆	一〇,五二一.六	五.六六〇	五三八
雜穀	四一七.四	一七.五五	四二
計	三八,三六〇.八	四〇一.四九〇	一

種別	作付段別	收穫高	段當收穫量
粟	三,〇八〇.四	二六七.九七三	八六三
稗	一,三三七	七.二六七	六三
黍	一七.一	五〇.一	二八二
玉蜀黍	二二.九	四五	三五〇
計			

種別	作付段別	收穫高	段當收穫量
蕎麥	五,二〇九.三	三七.八六八	七二七
計	三七,六一三四	三三三.五五五	一

種別	作付段別	收穫高	段當收穫量
大麻	四一.一	一一.三四七	二八
青麻	一.四	三〇.八	三
格草	一〇	三五〇	三五
莞草	三.四	二四八.〇	七〇
合	三六.九	一四四.八五	一

種別	作付段別	收穫高	段當收穫量
濟州	一七五.五	一四七.四二〇	八四
右州	四二八.三	四四五.四三三	一〇四
右州	一,〇五五.八	一,一一九.二四八	一〇六
大田	三八七.二	二六三.三二八	六八
中田	一八六.〇	一三九.五〇〇	七五
左田	一七〇.八	一六五.六七六	九七
計			

一、經濟

一、經濟養蠶

種別	橘柑		梨				果			種別	計		
	價	收	今	西	早	長	柳	鳳	紅			倭	
額	1,500	1,800	1,300	337	211	150	740	250	48	14	158	34	2,876
量				秋	梨	赤	郎		玉	卵	玉	錦	
樹數													
收穫高													

備考 前年旱魃の爲め收穫量激減せるに因る

二、八七六

六、九四七、八〇〇

種別	棉花共同販賣高		生活狀態調査						
	價	數	右	西	東	旌	蓍	新	楸
瓜	1,540	2,780	757	528	293	683	636	789	26
菜	2,862	1,930	757	528	293	683	636	789	26
苜	2,307	1,540	757	528	293	683	636	789	26
薯	488	1,930	757	528	293	683	636	789	26
蒜	2,307	1,540	757	528	293	683	636	789	26
計	6,311	2,618	757	528	293	683	636	789	26
平均	1,25	942	150	92	75	97	75	90	65

飼育戸数	1,100戸
榎立枚数	1,137枚
生産高	490石
総價額	25,000円
共同販賣高	23,500円
共同販賣高價額	10,569円

小作

濟州島に於ては、山間地方は自作農が多く、小作関係の盛んなのは海岸地方である。而して小作契約を締結するのは普通舊の十二月で、その期間の定めは殆んどなく、地主は悪ければ小作人を換へるが、良ければ何年でも繼續して小作さすのである。

小作料は大體に於て陸地部と同様番作も田作も折半を標準として居るが、地主より小作人に特定の田を指定してこれに粟を作付せしめた時は、その前作たる麥の小作料を徴收せずに、粟を全部納付せしめるとか、又はその粟の三分の二を地主、他の三分の一を小作人が收納する慣行が多い様である。また棉作は普通金納に小作料を徴收する慣行があり、概ね段當十圓乃至三十圓の割で納付せしめるのである。

普通の慣例は小作料は純粹の折半で、粟稗の儘折半することとし、一般にその耕地に於て分配し、各自が運搬するのである。この際地主が多少遠方に居住する關係上、その運搬を小作人に依頼する時は、その粟稗は小作人の收得する所となり、地主に對して種穀丈けを納付するのである。更に遠方で運送機關を利用せねばならぬ様な場合は、種穀を折半してその運搬費は地主の負擔として居る。次に數年連續小作する際に於て、輪換栽培の爲め一年又は二年休閑する場合は、全然小作料を納付せぬのを通例とする。

濟州島には中間小作の如き例は絶対にないが、農監とか舎音とか云ふ制度は、特例を除いて殆んどないのである。地主の都合により又は止むを得ざる事情で小作権を取上げねばならぬ際は、麥を作付した後はその麥を收穫する迄は絶対に小作権の移動を行はない。これは濟州島では農作に肥料を施用するのは麥丈けと云つてもよい位であるから、折角肥料を施した田を途中で、取り上げる事は情に於て忍びない爲めである。地主は小作人に對し、他の地方に見るが如く小作料以外に、勞働を提供すが如き例は絶対にないさうである。

畜産

漢拏山の裾野を繞る六萬餘町歩の大原野は、古來自然の大牧場となつて居り、更に耕地中の休閑地が牧

畜に利用せられ、また秋の收穫後春の播種期迄の間は、作付して居らぬ耕地に牛馬を放牧する慣習があり、従つて島内到處所に牛馬が悠々群棲する様は實に壯觀を極め、豚鶏は戸毎に養はれ、鶏卵は移出物産の主要品となり年産額三百萬個を上下し、また養蜂の發達は全鮮に冠絶するの盛況に在る。濟州島に於ける畜産獎勵機關としては、畜産同業組合、鶏卵移出組合、養蜂協會、養鶏組合、普通學校兒童養鶏會、養鶏青年會等があり。官民協力して畜産の發達に努めて居るが、牛馬の放牧に就いては、近隣の農家數戸乃至十數戸一團となり、共同作業を以て交代で放牧を行ひ、一團の中の或る一人が各農家の牛馬を集め、一纏めにして放牧に行くのであるが、これに當るものは概ね小供にして、早曉又は薄暮、彼の廣漠たる原野に、數十頭の牛馬を、鮮童が二尺内外の鞭を振りながら、唄を歌つて往復するのを見るときは、一種の情趣が湧くのを覺ゆる。

**畜牛** 濟州島の畜牛數は實數七、八萬頭と認定し得ると稱され、馬と共に放牧を行ひ、冬期に限り小屋に於て飼養し、牛舎の如きも極めて簡單で、唯一の飼料源は牧場に在り、飼料は野草及び栽培飼料として荳茶(カワラゲツメイ)・粟・稗を主とし、内地及び朝鮮本土の如く稻稗を粗芻に代用することは全くない。牛の體格は南鮮牛に類似し、體軀概して倭小であるが、抵抗力強く、性溫順である。その體格の不統一なるは從來自由放牧の關係上亂交尾が行はれ、種牛選擇手續の困難なると、飼料の一定しない結果であらう。

當局は畜牛改良第一期計畫として、毎農家平均飼養頭數を二頭とし、現在の牡牛數を約一割に低減し、蕃殖牝牛をこれに代らしめ、以て生産の増加を期し、一面販路の安定を計る爲め、各種の施設を行つて居たが、會々先年、株式會社竹中罐詰製造所朝鮮分工場を同島に設置し、屠殺解體より、直ちに製造に移さるゝやうな設備が出来てからは、原料肉の新鮮なる點と、製造技術及び工場設備の完全なる點に於て、肉用牛の需要は頗る増加した。而して從來當局の執り來りたる施設計畫の要項を示すと、(一)指導技術者の充實、(二)畜産組合の牧場經營改良、隔年轉換式放牧、牧草はルーサ白萩及びクロローバーを主とす、(三)壁虱の驅除、(四)牛馬籍の整理改良實施、(五)畜牛の移出検査施行、(六)家畜市場の開設經營秤量取引仲介、(七)劣等牡牛の去勢整理計畫遂行、(八)飼料作物の栽培獎勵、(九)屠獸場の改善及び冷蔵装置の設備、(一〇)獸疫豫防及び病畜治療である。

**養鶏** 濟州島の鶏卵移出は既に十餘年の歴史を有し、木浦より釜山に現在市場を移し、現今は殆んど釜山へ移出さるゝも、從來は鶏種の改良行はれざりし爲め、小粒卵及び陳舊卵多き缺點あり、殊に販賣組織の缺陷の結果、生産者の収入は一卵一錢を得ることが困難なる状態であつた。

そこで大正十二年鶏卵移出組合を設置し、釜山の販賣所を經營し、續いて各面に絶対改良を目的とする

養鶏組合を設置し、生産卵集卵及び學校兒童の産業教育を目的とする學校兒童養鶏會を設け、更に道令を以て鶏卵移出業取締規則の發布を見るに至り、移出業許可制度を採り養鶏組合を統一指導するの外、移出組合自體も生産改良を行ふ爲め、組合員の範圍を擴大して養鶏組合を加へ、販賣所の組織及び經營方法を根本的に改革し、全羅南道畜産聯合會鶏卵共同販賣所を指定し、補助金を交付するに至り、濟州島の養鶏業は前途好望なるに至つたのである。

**養蜂** 濟州島に於ける養蜂の起源は四五十年に過ぎないが、養蜂好適地極めて多きを以て、獎勵指導の宜きを得ば、將來有望なる産業たり得べく、大正十二年度より調査を周到にし、英國黄金種を獎勵品種と定め、先づ講習より實地指導に移り、種蜂の供給斡旋、懇切なる指導獎勵により、既に改良種一千群を算し、産蜜四萬斤内外に達し、朝鮮養蜂界に頭角を現はすに至つたのである。大正十四年三月より養蜂協會を設立して活動して居るが、同島は蜜源豊富にして流蜜期長く（七月）越冬期限率の僅少なると、南部は周歲流蜜し年中産卵を休止せざるものさへあり、且つ蜜源の種類甚だ多く、蜜源植物の主なるものに春の薔苔（二月初旬より）、椿・十字科作物・紫雲英・櫻・桃・李クローバー・ニセアカシア・柑橘類・梨柿・梅檀・蕎麥・胡麻・長刀菘・帶草・栗等あり、就中流蜜長く蜜質良好にして分布最も廣く殆んど秋蜜の主體を爲す重要蜜源としては長刀菘・帶草と蕎麥等があるから、養蜂上頗る有利な條件を備へて居る。

**養豚** 濟州島内の各戸に、最も飼養普及せる家畜は豚にして、殆んど飼養せざる家はなき迄に普及して居る。豚の飼養法は頗る簡單なもので、便所の横または一隅に豚舎あり、豚は人糞を食つて生育して居る。近時養豚業は大に發達しつゝあるも、未だ獎勵品種たるバークシヤ種の雜種改良は一般に普及するに至らず、當局の獎勵方針は二〇貫乃至三〇貫程度のバークシヤ種雜種改良を行ふにあり、飼料は今後廣汎なる間地にルーサン及びクローヅァー栽培による放牧を爲し、以て養豚の生産獎勵を計り、續いて家庭向小型燻肉製造業を獎勵せんとして居る。されば將來豚肉加工業の開始に依り、豚の改良と生産増加は著しく誘導せらるゝであらう。

**牧馬** 全鮮馬匹總數の三分の一強は、濟州島産馬にして、所謂ポコーに屬する純朝鮮馬である。その特徴とする所は抵抗力強大、蹄質強靱なることは他の馬種に超絶し、岩礫壘々たる中を蹠蹄にて能く服役し、粗野の飼養管理に堪え、年中放牧して厩舎を設けざるものもある。體高三尺七―八寸を普通とし倭小である。現在濟州島に於ける馬の利用は、粟の播種時に於ける鎮壓に使役されて、運搬用又は耕作用に利用されることは比較的少いのである。しかしながら濟州島馬は、炭坑地方に於ける坑内作業馬、一般軌道用軌馬、避地にある農村山岳部の運搬用駄馬、荷車前軌馬、少年婦人用乘馬、輕駕車用軌馬に適して居るから、將來内地供給は有望なる事業であると思ふ。

尙ほ参考の爲め、畜産に關する最近の各種統計を左に掲げて置く。

家畜家禽現在數 (大正十五年 和昭元年)

種類別	種別	飼養戸數	種別	種別	飼養戸數
牛	牝	一八、一八九	豚	牝	二〇、六〇九
	牝	一六、六二六		牝	三六、三三八
馬		七、〇七九	鶏		三三、三四五
		一〇、七九〇			二、一四二

家畜一箇年生産高

種類別	種別	計	種類別	種別	計
牛	牝	一、九二二	豚	牝	一五、五八四
	牝	二、四六六		牝	二九、〇二二
馬		一、二三三	鶏		三三、三四五
		八、五			五、一六九

家畜一箇年屠獸數

種類別	種別	計	種類別	種別	計
牛	牝	一、九〇九	豚	牝	一三、四四七
	牝	一、七五三		牝	二五、二六六
馬		一、二三三			

畜産物製造高 (昭和元年)

種類別	數量	價額	種類別	數量	價額
改良牛皮	三、一〇〇斤	一、四四五円	在來牛皮	五、三三〇斤	一、五九三円



林業

濟州島林野面積は八萬三千町歩に達し、同島全面積の約四割を占め、往時は國立の大牧場あり、その面積全島の半を牧場に供せられたる結果、森林は次第に樹影を潜め、牛馬の蹂躪に委し、加ふるに濫伐暴採を行ひ、現今の如き廣漠たる草生地を現出するに至つたものと思はれる。

濟州島の林野中、山場(國馬の放牧場)は入山を禁せられた爲め、樹林は保護せられて伐採を禁じた結果、樹木繁茂し、鬱蒼たる天然の美林を保持することを得たるものである。當局は大正三年に林野區分調査に着手し、甲種要存漢峯山國有林の外七箇所二萬五千餘町歩の國有林を調査し、大正五年三月終了し、降つて大正八年林野整理調査を施行し、大正十年外業のみを終了し、同十一年十二月査定を公示し、以て本島の林野所有別境界を見るに至つたのである。今最近に於ける林業の一斑を示せば左の通りである。

牛	骨	一三三、五六〇	蜜	六九一	一、三八二
牛	脂	三、七五〇	牛乳	五〇〇	五〇〇
豚	毛	四七〇	鶏卵	六、〇〇一、一〇〇	一、五六〇、五五
豚	脂	二、一〇〇	計		三、四七、七五
蜂	蜜	六、七三二			

イ、林相別面積

一、成林地	一、一〇三、二〇〇 <sup>町</sup>
二、稚樹地	四、四一三、一〇〇
三、未立木地	三三、九七一、〇五二
計	三九、四八七、三五二

ロ、公私有別面積

一、甲乙要存林野	二七、四二五、〇〇〇 <sup>町</sup>
二、第一種不要存林野	八三〇、〇〇〇
三、第二種不要存林野	二六、三二六、〇〇〇
四、私有林野	二八、三七〇、〇〇〇
計	八二、九五一、〇〇〇

ハ、立樹の種類又は適樹

一、針葉樹林	二、七五八、〇〇〇 <sup>町</sup>
二、針闊混淆林	一、六九〇、〇〇〇
三、闊葉林樹	一、〇六八、三〇〇

計

五、五一六、三〇〇

ニ、植林

苗圃名稱	樹種	苗圃名稱及生産數	生産本數	生産額
森林組合苗圃	黒松	黒松二年生	二、〇〇〇、〇〇〇 <sup>本</sup>	七、〇〇〇
同	黒松	黒松一年生	一、五〇〇、〇〇〇	九〇〇
同	クヌギ		四〇〇、〇〇〇	一、六〇〇
同	ニセアカシヤ		五〇、〇〇〇	二〇〇
計			四、一〇〇、〇〇〇	一〇、七五〇

ホ、官公營植林状況

而横範林及び學校林設置 愛林思想の喚起と造林事業技術修得を主眼とし、一般民間に造林の模範を示し、植林造成に努めつゝあるが、その状況左の通りである。

設置別	設置個所	面積	同上植栽面積	植栽本數
各面	一七	一七七、七九〇	一六二、七三〇 <sup>町</sup>	五六九、九九〇 <sup>本</sup>
學校	一三	九七、七二二	三〇、三八〇	一九一、三〇〇
一、經濟				五七



計 三〇 二七五、五〇二 一九三、二一〇 七六一、二九〇

個人經營植林状況  
大正十四年度より補助造林地設置すると共に、一般愛林思想の普及、並に樹苗養成指導奨励、或は面模範林、學校林、紀念林等、模範作業を示し植林造成に努めて居るが、その状況左の通りである。

設置個所	植栽面積	植栽本数	設置個所	植栽面積	植栽本数	設置個所	植栽面積	植栽本数
同上一般造林地	500,000	1,230,000	同上一般造林地	300,000	1,230,000	同上一般造林地	500,000	1,230,000
同上一般造林地	1,000,000	1,230,000	同上一般造林地	1,000,000	1,230,000	同上一般造林地	1,000,000	1,230,000

記念植樹状況

區別	島	面	學校	其他	計
黒松	250本	61,350本	14,000本	25,500本	101,100本
養成苗	1	1	1	1	4
ボブラ	1	1	1	1	4
挿木	1	1	1	1	4
櫻	1	1	1	1	4
養成苗	1	1	1	1	4
クマギ	1	1	1	1	4
桐	1	1	1	1	4

チ、生産物數量及び價額

種別	數量	金額
丸太	九二、四九六	七、七〇九
木材	五、五五九	七、七六一
計	一五、四七〇	一五、四七〇

リ、副産物數量及び價額

種別	數量	金額
芝草	六、〇〇〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇
木炭	四三〇、〇〇〇	四三、〇〇〇
藥草	一、一五〇	一、一五〇、〇〇〇
計	一	二二四、一五〇

エ、林野被害状況

- 一、盗伐件数 九〇件
- 二、誤伐件数 七件
- 三、火災件数 三件
- 四、松蛄蜥被害面積 一、四七九町

水産

濟州島は面積の大なるに比し海岸線短くその延長百五哩に過ぎず、沿岸の彎入屈曲頗る少なく、海岸は突兀たる黒色の熔岩にて圍まれ、砂濱を見ることあるも、概して港灣に乏しく、たまくこれあるも岩礁港内に横はる爲め、船舶の出入に危険を感じ、適當なる避難港及び漁船の根據地となるべき母港の少き不便はあるが、同島は臺灣の南西より流下せる暖流の大隅海峡の西にて本流より分離された支流が沿岸を洗ひ、對馬海峡に向つて流れ去る爲め、鮪・鰹等の暖流魚族を沿岸に誘致し、鯖・鱈・鰺の如き暖流を好む又は寒潮を恐れざる魚族が多い。潮汐干満の差は僅に五六尺にして、漲潮は西方へ、落潮は東方へ向ひて流れ、河川は概して小く、流域長さも四里短きは一里位にて、多く平時は流水を見ず、地下水となるもの

多く、従つて降雨時の濁水はたまく海水に混濁し、鰻類の漁獲を便ならしむることあるも、程なくこの一時的混濁は清澄に歸し、魚族の滞留期を短からしむるを免れない。故に海藻・貝類・及び少數の底着魚を除くの外、回游魚類は一旦同島沿岸に來遊し、漁民をして豊漁の喜びを感せしむることあるも、一時的の喜びにして、程なく不漁の嘆きを見ることが多い。沿岸は火山岩にて蔽はれ、これが海底迄遠く延びて居るから、和布等の有用藻類に良好なる附着面を與へ、潮流の速度早き爲め、これ等の海藻繁殖には天與の場所と云ふべく、鮑・蝶螺等の貝類には絶好の繁殖地と爲り、全鮮中に於ても屈指の産地である。

濟州島に産する魚族は、鰻・鯖・鰹・鮪・鰺・ひらめ・鱈・鯛・連子鯛・黒鯛・太刀魚・甘鯛・沖鱈・かちきり・石首魚・あんかう・めばる・べら・ほうぼう・鰹・鱈・鮎・鰻・烏賊・鮑・蝶螺・いせえび等にして、海藻には和布・搦布・石花菜・ふのり・ひぢき・ほんたわら・岩のり等あり、漁獲物の處理方法に就ては交通の不便、設備の不完全なると、陸地と隔絶せる關係上、一般に甚だ幼稚にして、漁獲の多き場合には空く腐敗せしめ、また眼前に魚群を見るも捕獲出來ないこともあつたが、最近に至り鰻は搾粕工場設備せられ、鯛は鹽藏の外、氷藏にして内地へ移送せらるゝに至り、内地人の罐詰工場を開くもの等ありて鮑・蝶螺・魚類の罐詰を製出するもの續出するあり、鯛・鮑の粕漬を作るもの、鰹・鱈より蒲鉾を作るもの、目刺鰻を製するもの、鰹節を作るもの、烏賊よりすめ、鹽辛を作るもの等、近時著しく製

造法の進歩を見ることを得たのは欣ぶべき現象である。また鯧の漁業は近時著しく衰へた結果、昔日の如き盛況を見る能はざるも、朝天・咸徳・月汀・金寧・郭支・城山浦・楸子島にてはこれを繼續し、工場を設け年額五六萬貫の搾粕を産出して居る。

潜水器漁業者は合計十三臺ありて、杏源・城山・西歸・慕瑟浦・楸子島を根據とし、鮑は明鮑に製し、海鼠は海參に製し、長崎より支那へ輸出して居るが、最近鮑は活かして阪神地方へ直送しつつある。

濟州島には濟州島海女漁業組合あり、同組合は島一圓を組合地區とし、組合員八千餘名にして、大正九年の創立に係り、本部を濟州面三徒里に置き、各面に十二の支部を設け、更に出稼海女の保護監督の爲め釜山に出張所、木浦・麗水に假出張所を設けて居る。月汀里漁業組合は大正五年に創立せる組合にして、漁業權四件を有し、基本金等三千餘圓を積立て、漁獲物共同販賣と遭難救恤を行ひ成績優良である。楸子島漁業組合は楸子島一圓の組合にして、大正七年の設立に係り、組合員千六百名、漁業權十二件を有し、漁獲物共同販賣必需品共同購入遭難救恤等を爲して居る。西歸漁業組合は大正十四年に設立せられ、右面を區域とする海女を除く漁業者を以て組合員と爲し、漁獲物共同販賣、共同貯金、遭難救恤等の事業を爲して居る。

特に濟州島に於ける海女の活躍は盛んにして、彼等は同島沿岸のみならず、慶南・全南を中心として朝

鮮各地に分布され、遠く内地へも出稼するさうである。その収入は一日平均五六十錢より二三圓に及び、彼等によりて稼がれる収益は莫大なものである。

水産業者戸口表

業	別	内地人		朝鮮人		總計	
		戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口
		男	女	男	女	男	女
漁業	業主	二五	一、三三	一、三三	一、三三	二、六六	二、六六
	兼業	八	六	六	五	一四	一一
	專業	一	一	一	一	二	二
養殖業	業主	一	一	一	一	二	二
	兼業	一	一	一	一	二	二
	專業	一	一	一	一	二	二
總計		三四	三三	三三	三三	六七	六六

種別	漁管内在住者		内地より通漁者		他道より通漁者		計		計		計	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
鯖	朝鮮人	106,310	3,265	850	2,515	106,310	3,265	850	2,515	106,310	3,265	850
	内地人	11,400	140	11,400	140	11,400	140	11,400	140	11,400	140	11,400
鰻	朝鮮人	151,000	4,100	1,100	3,000	151,000	4,100	1,100	3,000	151,000	4,100	1,100
	内地人	22,000	200	22,000	200	22,000	200	22,000	200	22,000	200	22,000
石首魚	朝鮮人	9,000	100	1,000	100	9,000	100	1,000	100	9,000	100	1,000
	内地人	2,000	10	2,000	10	2,000	10	2,000	10	2,000	10	2,000
鯛	朝鮮人	31,000	600	1,000	200	31,000	600	1,000	200	31,000	600	1,000
	内地人	3,000	300	3,000	300	3,000	300	3,000	300	3,000	300	3,000
太刀魚	朝鮮人	4,000	100	500	100	4,000	100	500	100	4,000	100	500
	内地人	1,000	50	1,000	50	1,000	50	1,000	50	1,000	50	1,000
鱈	朝鮮人	3,000	300	1,000	100	3,000	300	1,000	100	3,000	300	1,000
	内地人	3,000	300	3,000	300	3,000	300	3,000	300	3,000	300	3,000
海羅	朝鮮人	5,270	2,376	1	1	5,270	2,376	1	1	5,270	2,376	1
	内地人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計												

漁獲高類別表 (通漁者漁獲高 内地人は管外より 朝鮮人は管内より) (昭和元年)

考 一、本表中従業者にして内地人の本業は商業、鮮人の本業は農業を替む。  
 二、漁業者前年に比し増加あるは島外出稼者にして歸郷後漁業を替む者多く尙現今水産業發展に伴ひ他業を廢し新業に着手する者の増加に依る。

生活状態調査	製水産業		販水産業		合計	
	無業者	従業者	無業者	従業者	無業者	従業者
専業	1	1	1	1	1	1
有業家族	1	1	1	1	1	1
無業家族	1	1	1	1	1	1
業主	5	3	5	3	5	3
従業者	8	3	8	3	8	3
無業者	5	3	5	3	5	3
合計	15	7	15	7	15	7